

## 2015年コンテスト大阪大会決勝 審査委員長講評

### 中村宏アナウンサー（NHK大阪） アナウンス・朗読部門

お疲れ様でございました。例年接戦になっておりますが、今日も上位の方は点数的にかなり接戦になっておりました。いくつか朗読、アナウンス部門をまとめてお話をいたします。他の審査員の皆様のご意見をまとめて私がお話をさせていただきます。

いくつかありますが、まず読みに関して言いますと、アナウンス朗読ともにはっきり言おうとするために力みがあるという方々が大変多かったということが言えます。我々の、皆さんが最後に目標とするところは「話すように読む」ということです。だから話しているみたいに読むということが、我々の仕事もそうなんですけれども、まあなかなかできませんけどもね。でも目標は話すように読むということなんです。そのためにはやはり無駄な力を抜いて普段しゃべっているように、あたかも普段しゃべっている様な感じで読めるというのが一番いいことだなと思いますね。イントネーションが、したがって非常に不自然になっている方が多い。普段我々がしゃべる時っていうのは、最初の方が高くてだんだん下がってくるんですよ。日本語の特徴、共通語の特徴と言ってもいいと思います。ところがこれがやっぱり大阪弁の特徴なんですけども、大阪弁は高く入ってゆっくり下がるっていうイントネーションではなくて、共通語の場合はアクセントよりもずっとイントネーションが優先しますから、多少アクセントが違って、イントネーションがこうならかに下がっていくような、意味のまとまりの中をゆっくり下がっていく、新しい意味のまとまりはまたちょっと高くなってゆっくり下がっていく、そういう読み方をするととても自然にすっと入っていくんですが、大阪弁の場合は単語のアクセントが優先しますから単語の位置がある特定の単語はある高音の高さを持っていて、イントネーションよりも単語のアクセントを優先するって特徴がある、そういう文化圏に皆さん暮らしているわけで、ある程度そういうものが体に入っているという可能性があるわけですね。例えばどういうことかという、「サクラ」っていうのは皆さん、生まれも育ちも大阪の皆さんは「サクラ」っていうと気持ち悪いでしょ。「サクラ」は低い音って決まっているんですって。「サクラ」って。「サクラ」にはならないんですってね。皆さんの方がお詳しいんでしょうけども。例えば「今年」という単語は高い音って決まっているんですよ。だから「今年の阪神」ですね。「今年の阪神」ではおかしいわけです。そうらしいです。私も体の中では分からないんですが。でも「毎年」という音は、低いって決まっているんですって。だから、「毎年」っていうとおかしいんですって。「毎年」。ですから「今年の阪神いけるんっちゃう？」「毎年いうてへんか」ってなるわけですね。共通語の場合はイントネーションが優先しますから、「今年の阪神いけるんじゃないの？」「毎年言っていないかい」ってなるわけです。だから単語のアクセントも例えば大阪の特徴として平板アクセントの中で「サクラ」が多分そうなんですけど、「サ」と「ク」と「ラ」の高さが無いんです。「サクラ」同じなんです。ところが共通語のアクセントは平板アクセントといいながら2音目が上がります「サクラ サク」「サクラ」「サクラ」「サクラ」これを平板アクセントと言っているんですよ。ところが大阪にはそういう平板アクセントと完全に全部同じ高さ「サクラ」のようなアクセントがあるわけですね。で、文の最初最後にかかわらずそういう固有のアクセントが決まっていて、例えば2音目が非常に高くなるアクセントがあるんです。そういう特徴がある方が何人もいらっしやいました。例えば「健康」っていうと東京では「ケンコウ」っていうんですが例えば今日の出場者の皆さんでも「ケンコウ」

って言う方も結構いて「ケンコウ」これはやっぱり大阪的な平板アクセントの特徴が出ているかなという感じがしましたね。あとは速い人が多い。非常に速い人が多い。これは時間制限があるためだと思うんですね。だから本当は少し余裕をもって後は間をとる。間をとるところを印つけといて、間をとる。そういうふうにして時間を計って、部分を、読む部分を選んでおくといいと思うんですけどね。それと、今日突然お渡ししたアナウンスの課題ね、結構読みこなせてない人が、多数いらっしやいましたが、我々も例えばニュースを読むときなどは、だいたい2回くらいしか読めないんですよ、すぐ本番がきちゃいますから直前に貰いますから。そうすると1回目はタイムを出すことで純粋に時間を1分20とか1分30とか時間を出すために読まないといけませんね。ニュースですから5分でぴったり入れるために時間をこう調整しますから。でもう1回自分のために読むんです。意味をとりながら。で、プラスその際にもう本番までその原稿読めませんから、もう次の原稿、下読みしますから。どういうことをするかというと、アナウンサーはそれぞれ自分の流儀で印つけます。例えば今日渡した課題原稿でいいますと、妙な切り方をする人が多くて。例えばね、持ってない人も多いと思いますがアナウンスの今日の課題でお渡しした5行目、「真剣な表情で食べると」その後点がないんですよ。「真剣な表情で食べると」点がないから皆さん続けて読んでいる人が多くて「真剣な表情で食べるとこの一年健康に過ごせる」とずーっとつなげちゃう。でもそうじゃなくて「真剣な表情で食べると」の後に小さい間があつてですね。だから私だったらここに小さいプレス書くんです。でどうなるかというと「真剣な表情で食べると、この一年健康に過ごせるという笑わず餅を」で「笑わず餅」で行が変わっていますよね。だから行が変わったときに私は次の行までね、ずーっとね、こういう印をつける。アナウンサーによってまた違う印をつけるんですが。でそうやって自分なりの例えば「全国和紙協会」っていうのはね、意外と読みにくいですが、これは私だったら「全国」に丸つけて、丸で囲んじゃって「和菓子協会」を丸で囲んじゃうんですね。これは先輩が、私の尊敬する先輩がそんなふうにはやっていたんです。ただ、これアナウンサーによっては「全国」の後に横線を入れる人がいますね。「全国」で切れるという意味で「全国」に横線を入れる。で「和菓子」の後に線を入れる人もいますが、そうやって自分なりのその印の付け方っていうのを、こう作っておくと突然原稿をもらって1回下読みして2回目意味をとりながらもっかい読んで、印をバツバツバツとつけておくとあとは読めてしまいます。あとは、キーワードがきちんと聞き取れないっていうのがあって、この「笑わず餅」の原稿がかなり難しいというのはわかったんですが、これがね「笑わず餅」に聞こえる人がいるんですね。「笑わず餅」と「笑わず餅」ではまったく違う内容になってしまうので。こういうキーワード、大事な固有名詞が最初に出てくるとき、何回もしつこく言っているとどいからです。だから例えば、この一年健康に過ごせるという「笑わず餅」を販売しています。こうなるんですね。「この一年健康に過ごせるという笑わず餅を」とみなさんそうやって読んでいます。「この一年健康に過ごせるという笑わず餅を販売しています」とほら「え？え？え？なんて言ったの？」この一年健康にすごせるという「笑わず餅」をここだけ本当はゆっくりするといいいんですけど。キーワードを本当はゆっくり読む。意外と難しいんですよ。この一年健康にすごせるという「笑わず餅」を販売しています。これ、意外に難しい。一番簡単なのは間をとるとそれが立ってきますから。この一年健康に過ごせるという「笑わず餅」を販売しています。ちょっとした間をとるとかね。そうなのは印つけといて下さい。2回目に「笑わず餅」が出てきたときはもう1回目に出てるので、そこで「あっさりした味わいに仕上げた笑わず餅」でいいわけでしょ。だから究極は話すように読むというのを目指してください。それから、これもアナウンス部門ですけれどもネタをこう取材して短くまとめて、何

かを人に伝えるという訓練は皆さんがこれから人生を歩いていくビジネスマン、ビジネスウーマンになる場合、そうでない場合でも人生生きていく上でとても役に立つ経験ではないのかなというふうに思います。審査員の他の先生からもでていたんですが、その、こういう人前で話すときに大事なことは、エピソードとメッセージなんです。エピソードとメッセージが大事なんです。スピーチというのはね。メッセージは何を伝えるかってことなんです。エピソードがきちんとしてないと、「何とかが大事です」って言うてもなぜ大事なのかが分からない。エピソードがきちんとしてることによって、こう腑に落ちてくる。説得力を持ってくれるんですね。そういう点で、今日は出だし立派なことを言って、ぶち上げて、まとめもとても美しいことを言っているんだけど、全然迫ってこない。なぜかというエピソードが弱いんです。だから、それはやっぱり取材であって、それから、今日審査員の他の方からできてきましたけど、取材した人の話が全部こう、大括弧の話し方になってる。台詞みたいになってる。なんでみんなそうなるのかなというふうに言っていましたら、みんながみんなそうなる必要はないんじゃないかなというふうには思います。だからね、あとね、これはアナウンスの原稿もそうなんです。人の話を聞いて、例えば一行か二行、20秒くらいまでの間に、何について話すのかということが分かってないと、聞いている人がなかなか飽きちゃうんですよ。ついて行きにくいという。だからニュースなんかでもそうでしょ。冒頭に15秒か20秒くらいのリードというのがあって、あらましを言ってしまってるんですよ。これこれこういうことがありましたっていうことを言った後、その後説明がくるでしょ。そういう構造にした方が非常にわかりやすいということですね。あと、インタビューを多様しすぎているんじゃないかとかね。

それから朗読についてもその作品をちゃんと全部読んでますか。読んでないとやっぱりばれちゃいますと、特に安田さんがおっしゃっていました。で、放送部の活動をやっている人は、朗読をやっている人は朗読だけでいいとか、アナウンスメントをやっている人はアナウンスだけでいいとかではなくて、やっぱり総合力だと思うんですね。アナウンスをやっている人も朗読をやることによって勉強になるし、朗読をやっている人はアナウンスをやることによって勉強になるし、何が大事かってのがわかるし、そういう点で放送部っていうのは総合力が大事ですよっていうことを感じました。で、今日これから表彰式に入るんですけど、上位に入った人達は自分とどこが違うのかっていうところを思い出していただければと思います。以上です。

### 三鬼一希プロデューサー（NHK大阪放送局） 番組部門

皆さん大変お疲れ様でした。今日皆さんの全力の作品をですね、審査員の先生方、私も含めてですね全力で審査させていただきました。逆に普段制作をしている中からですね、皆さんの気づきだったりとか視点にすごくびっくりした作品も、本当に数多くありました。ちょっとね、部門別に講評をさせていただきたいと思います。こちらで審査したのが5つの部門でした。

ラジオドキュメント部門からまいります。これは本当に学校で、皆さん普段感じている、放送部員として感じているほんのちっちゃな所から、本当にこの世の中に起こっている社会全体、そういう本当に一人一人の気づきが世の中の仕組みを、世の中の問題点をさぐっていくというものもあれば、友達との会話の中からこれどうなってんのかなみたいなところから出発しているもの、本当に様々な多くのテーマが

ありました。そういう意味で、ドキュメントっていうものをあまり偉そうにはいえませんが、やっぱり自分の中でこれおかしいんじゃないの？とか、これ面白いんじゃないの？。我々放送に携わる人、放送を志す人、放送部で所属されている人、まず自分の中でそういう気づきをもつ、違和感をもつ、面白みを見つけると、そういうことが改めて大事だなと。ここに予選を通過された方には、その人達、その制作者の思っているのが本当に深くあるんだと確信できました。じゃ、次はそれをどう表現するかです。これはラジオという事なので耳でしか分からない、音でしか分からないという世界の中。このためにどれだけの努力をしているか、ノイズを消すというのも一つですし、BGMの入れ方だったりとか、そういう所を本当に細心の注意を払っているというところもあるんですけども、もしかしたらこれ差し替えた方が良かったんじゃない？みたいなどころもあったのも事実です。そういうトライ&エラーをして、より自分だけじゃなくてこの自分が気づいたこと、自分が感じたことっていうのを聞いている人にどうやって伝えるのかっていうのを、今後も努力というか重ねていただければ今日以上にいいものが作れるんじゃないかと思います。中にはね、本当におっさんからすると分からない女子の魅力とかです。そういうネットもありましたし、ああなるほどそうなのかみたいですね。高校生ならではというかね皆さんの本当に視点から発したのも多くありましたし、片っ方で自分たちの目線からもう少し大きい社会の問題、学校のありようの問題とか、歴史の問題とか本当に幅広い興味を皆さんがお持ちなんだということはすごくよく分かりました。そういうところも評価させていただいたというふうに思っただけだと思います。

次に創作ラジオドラマ部門です。これはいわゆる妄想に近い話ですよ。ラジオドラマっていうのは実はNHKでもやっておりまして、ラジオドラマの担当の人間に聞いてるんですけど、ラジオドラマといえど宇宙の果てまでも行けるし、地底の中にも行けると。なかなか現実のテレビドラマではできないことが何でもできますよ〜っていうふうにいわれています。実際、今回も本当にいろんな舞台設定がありました。ラジオドラマっていうフィールドを意識されて皆さんが自分の思い、自分の着想、こういう話があったらいいのになんていうのを十二分に表現していただいている作品が予選を通過したものだというふうに感じます。先ほどと同じ事になりますが、ラジオドラマの場合、特に、ここが宇宙ですといえど宇宙になる世界なので、よりそれをリアリティーを持たせるためには、比較的今回思ったことで、皆さんに今後こうやったらいいんじゃないかっていうことを一つだけ申し上げます。BGMってよく使うんですけどもね、実はラジオドラマ、テレビドラマ関わらずなんですけども、なま音というのをやっています。わざわざそのために1日スタジオを借りて、よくあるのは海の音をこうやって「ザー」ってやったりするあれですね。あれを足音レベルでここはこの靴でやりますってかかっていうのを、テレビドラマだと人の足の動きに合わせてパタパタとやっています。特にラジオドラマはそういったなま音の使い方をBGMに頼らないなま音、BGM極端な話ゼロでやってやるくらいな勢いでやると、もっと聞いている人のイメージ、目を閉じて見える世界、感じる世界が深く変わっていくんじゃないかと思います。そういう意味ではそういうものにチャレンジしていく、その設定がちょっとファンタジックなものだけではなくて、今回本当にそこで話しているような題材もありました。その制作された方なんかはそういうところをもっとね追求していくともっともっと面白い物ができるんじゃないかというふうに思います。

続いてテレビドキュメント部門。これもですね本当に、学校の中の人の話、人モノっていうんですけ

どもね。この人面白いねってのを本当にその人の魅力をどうやって迫るかっていうカメラの位置も含めて本当に丁寧にとっているものもあれば、自分の主義というか自分の中から出たものをどうやって歴史に繋げていくかっていうことまで本当に幅広くできた作品がありました。中には自分たちとは普段はあまり関係ないけれども自分の興味のある人にアポイントメントをとって、その方の取材をすると。我々も普段取材をする時は、全く知らない方にしませんと話を聞く。なかなか話を聞かなくてというのは大変なことなんですけれども、放送というかですね、こういう取材、ニュースとかする場合には、やっぱりそこは自分の中で軸を持って相手の話を聞くとそういうことが十分にテレビドキュメント部門は出されている作品が多かったように思います。

創作テレビドラマ部門。こちらテレビドラマですね、映像ドラマですけども。こちら本当に先ほど申し上げたラジオドラマよりは映像を出す部分ですごく制約がある部分で、本当にもう、いろんなネタといいますかね、審査員の方々も観ているときに笑ってしまうような、思わず笑ってしまうような作品が本当にたくさんありました。本当に頭を使って、頭をクルクルクルしながら考えたんだなっていうのが分かります。そういう皆さんの楽しましてやろうという熱意ですね、それをいくつか講評でも、その時の講評でも言ったんですけど、こうやったらもっと面白くなるよっていうのをぜひトライ&エラーして自分たちのモノにして、楽しんでもらうモノを作ってもらいたいというふうに思います。本当に面白かったです。

最後、校内放送の研究発表の方ですが、これもすみません僕、昔、放送部ではなかったんです。なので放送部の皆さんの事よくわかりません。高校時代にその時は8mmフィルムってわかります？8mmフィルムでテレビドラマもどきはとってたんで、そういう皆さんの熱い感じは何となく分かったんですけど、放送部がこんなに熱いとは思わなかったっていうのは正直なところで、こうやったらもっと聞いてもらえるんじゃないだろうかっていう、本当に様々な視点から放送部の人がやってるんだなっていうのを本当に感心して拝聴しました。で、皆さんがこうやって学校の中で放送部としてやっていくんだという思いは本当に熱いんだなってっていうのがよくわかりました。敬意を表します。

最後になんですけど、全体的話ですね。偉そうな事は言えませんが、一応放送に携わるものとして皆さんに、若い皆さんにいいたいのは、放送というかまあ、こうやってドキュメンタリーでもテレビドラマでもそうなんですけれども、自分たちの中にあるもの、こういうの面白いよねとか、あ、これおかしいよねとか、そういうものがまず気づきとか、思いの中であって、それを形にして、で、最終的なことを考えてほしいんですよ。このおもしろさを伝えるにはこれでベストなのか。音もそうですし、映像もそうですし、どうしてもやってるとこっちの方がかっこええやんとか、こっちの方が感じええんちゃう？というふうになりがちなんですけれども、ま、我々もそうです。こうやってこうやった方がかっこいいんちゃう？とかやるんですけど、お客さん、観てる人、聞いている人がいると、放送っていうのは伝えてなんぼやと僕は思っているので、自分の中にあるもの、自分が大事だと思うもの、自分がおかしいと思うものを形にして、だれか分からないけど分かってほしい、分かって伝えたいっていうようなことをすると思っているので、今日の皆さんの作品はそれがすごく伝わってきました。で、ただ、これからもし放送協会なり何なりもっとそういうことをやっていきたいと思ったらもっともっと伝わる方法はあると思うので、そういうところを研究していただければと思いますし、いろいろ観て努力してもらったら

っといいものができると思います。皆さんのこれからの期待いたします。今日はどうもありがとうございました。